錬金の戦士の英雄譚

へのへのもへじです

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ただの武装錬金が好きな青年が落第騎士の世界に転生した

その青年は何を目指すのか

＊作者は今作が正真正銘の処女作なので、ご寛大な感想などを頂けると幸いです

目　次

プロローグ ―――――――――――――――― 1

プロローグ

1

自分が死んだことをその時気付いた。
どうやって死んだのかとか、何によって死んだのかとか、そう言ったことは、何もわからないが、いつのまにか死んで、目の前に男がいる。
「あんた誰だ？」
俺はそいつに、そのまんまの思いで聞いた。
「ご想像の通り、神様さ」
いや、想像してねぇし。
「まあいいや、何の用？」
「単刀直入に言おう、君に転生してもらいたい。落第騎士の英雄譚（キャバルリィ）の世界に」
落第騎士の？知らないな。
「何だか知らないが、その世界はどういった世界なんだ？」
「まあ、簡単に言うと魔導騎士っていう固有霊装（デバイス）を持つ騎士が現代社会で兵士してる世界だよ。君にはそこで魔導騎士になって好きに生きてもらう」
魔導騎士？デバイス？何だそりゃ、そんなとんでも世界に行くとか、マジかよ。
「デバイス？ってのは何だ？」
「漢字で書いて、固有霊装。その人それぞれの武器さ。防具の人もいるけどね」
固有霊装（デバイス）、武器、か。
「君はどんながいい？刀？槍？銃？鎧？どんなものにでもしてあげるよ」
「ソードサムライX」
「は？」
「ソードサムライXだ。武装錬金の」
俺は即答した。

だって、俺は早坂秋水の逆胴に憧れてるんだから。
「武装錬金?ああ、あれか。わかったよ。じゃあ、楽しんでおいで」
そういって、俺を送り出そうとする神。
それを俺は引き止める。
「おい、なんで俺を転生させるんだ」
「暇つぶし」
神は即答した。
想定外だ。
「暇なんだよ、仕事はすぐ終わらせられるし、全然ないし、娯楽が少ないし。だから、たまに適当な魂を転生させて暇をつぶしてるんだ」
そうか。
「それだけなんだな」
「うん、それだけ」
「じゃあ、送ってくれ」
「了解、じゃあねぇ」
床が光り、俺は意識が飛んだ。
神ｓｉｄｅ
「久しぶりに面白いことしてくれる子どもかもな、あの子」
男が居なくなって、神は一人呟いた。
「武装錬金か、ただソードサムライXだけじゃあつまらないな。どうせなら、固有霊装(デバイス)は核鉄にして、形状変化的なのでソードサムライXやサンライトハートに出来るようにした方が面白いんじゃないかな」
そういって神は一人言を呟きながら消えた。
2
そして、俺は転生した。
俺は早坂　冬亜(とうあ)として産まれ、幸せに暮らした。
そして、転生して6年が経ったある日

俺と両親は死んだ。

3

「君が早坂　冬亜(とうあ)君か？」

死にかけて、俺一人生き残った。父も、母も、俺の隣で死んでいった。俺は、俺だけは核鉄に救われた。

病院で人形のように生きる俺に父の友人と名乗る人が来た。

「俺は綾辻海斗。君のお父さんの友人だ。俺に君を育てさせてほしい」